魔法少女リリカルなのは～転生～

akgka

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは～転生～

【Ｎコード】

Ｎ７５９０Ｙ

【作者名】

ａｋｇｋａ

【あらすじ】

ある日転生した少年、その世界は、なのはの世界。

そんな少年の物語です。駄目駄目な作者ですが、応援してください。

そして、ネタをください。お願いします。

思い、願い、絆、友情があるかもしれない（前書き）

この作品は、未計画で始まり、ネタも無い状態で始まり、そして作者にとって初めての小説、二次制作です。なので至らぬ所もあると思いますが、どうかみなさま暖かい目で見守ってください。そして、ネタもください。お願いします。

思い、願い、絆、友情があるかもしれない

いつもと同じ朝、だが登校時にそれは起きた。　「あなたには転生してもらいます。」　そんな言葉とともに僕の意識は飛んだ。目を覚ますとそこは白い世界なにもなくただ白い世界、そこに一人の女性がいた。彼女はとても美しかった、つい見とれてしまうほどに。僕は直感的に思った、「彼女は、神だ。」と、それと同じくこうも思った「彼女には、逆らえない。」と、本能が叫んでいた、従え！と、すると「あなたには転生してもらいます。」その声で僕は今の現状を改めて見直した。・・・・・・・・・・・・・

初です、きっと駄文ですがよろしければ読んでください。あと、投稿するのに時間がかかると思います。では、これからよろしくお願いします。

1話　始まりの日（前書き）

初めまして、ａｋｇｋａです。
今回が初投稿になります。
超初心者です。
文才など欠片もありません。
こんな僕ですが、暖かく見守っていただけると嬉しいです。
そして、ネタをくれるともっと嬉しいです。
何度も言います、これは未計画でネタが無い状態です。
助けて！！　けどがんばります。

ではどうぞ

1話　始まりの日

その日すべてが始まった。

「・・ｚｚｚ～」

その日は、いつもと何の変りもない朝だった。

「ピリリリリリリ」

目覚まし時計が部屋に鳴り響く、

「う～ん、んっ」

目覚まし時計を止めて起きる、

「はぁ～、よく寝た」

大きなあくびをしながら伸びる、

そのまま洗面所へ行き顔を洗い歯を磨く、

朝食を軽くすませ、

征服に着替えて学校へと向かう。

「あれ、いつもこの時間帯結構の人がいると思ったんだけどな？」

いつもと違うのはそれぐらいだ。

「まっ、いいか俺には関係無いしな」

信号が青になり歩き出す、

キィィィィィィィィィィイ

近くの角からトラックがすごい速さで突っ込んでくる！

「お、おい、ちょ、待っ」

そこで俺の意識が切れた。

「んっ、ん～～、ここは、どこだ？」

そこは一面真っ白な世界、

そこには白、白、白、人？がいた、

白い世界の中心に一人だけ人がいた、

その人は、見とれてしまうほど美しい女性だった。

そして俺は、直感した、この人は、神なのだと、

「あ、あの、すいません、少しよろしいでしょうか？」

神？が聞いてくる、

「え、あ、はい、全然構いませんよ」

俺は、なるべく丁寧に返した。

「あの、まず最初に言っておくことは、あなたは死にました、そして、新たな生を受けて転生してもらいます」

「はい！？」

俺は知っている、これは、死んで転生してチートな力を得てどこかアニメなどの世界に行くあれだ！

初めに言っておく、俺は、チートとアニメが大好きだ！

「えっと、転生してもらう理由ですが、あなたの運命を間違えて設定してしまいまして、すごく不幸になってしまってですね、その、一応直さなければならないんですが、えっと、本音を言うとですね、直すのがめんどくさくってだったら死んでもらって転生させちゃえ～、ということなんですが」

「あっそ、まぁ、なんでもいいや」

「えっ、いいんですか」

「ああ、こっちの条件を呑むんだったらな」

ははははっ、これで、チートの力がこの手にｗｗｗ

「は、はい、それでその条件は？」

続く

1話　始まりの日（後書き）

はい、どうも、ａａｋｋｇです。
はははまだ名前も出なかったですね。
がんばって書いていくのでよろしくお願いします。

けど今テスト期間中でバリバリテストやってるんで、
次の投稿は何時になるやら、
な、状況です。
なるべく早くに投稿します。

では

2話　転生！（前書き）

どうも、ａｋｇｋａです。

まず、アビス様感想ありがとうございました。

そして、この作品が厨ニって言う事に対して一言、

それは、自分＋周りの人をモデルに書いているからです！

だから、しょうがない事なんです。

では、作品の方へどうぞ

2話　転生！

～前回～

「ああ、こっちの条件を呑むんだったらな」

「は、はい、それでその条件は？」

俺は、あっちの世界に何の未練もなかった、
いつもなにも変わらないそんな日々にうんざりしていた。

今考えるとその所為かも知れない、
アニメ、ゲーム、小説、
毎日新しい事が起り、
退屈のしない、
そんな事に憧れていたのかもしれない。

～続き～

俺は、主人公になるんだ！

春原にはならない！

岡崎になるんだ！

「まず、条件を言う前に聞いておきたい事がある」

「はい、なんでしょう」

「俺が転生される世界と場所、その時の年齢、条件無しにもらえるものだ」

まずこれを聞いておかないと話にならないと思う。

「じゃあまず世界と場所から、世界は、なのはの世界です。場所は、ランダムです」

「ランダム、ミッドか地球かぐらい分かんないの？」

「場合によります、無印からなら地球、ＳｔｒｉｋｅｒＳならミッドかもしれないです」

「じゃあ無印で地球からで」

「分かりました、では歳ですが、０歳からです」

うっそーん

「マジで？」

「マジです」

「0からって、めんど」

「じゃあこうしましょう、3歳になったら力と記憶を付ける、ってのはどうでしょう」

「あ、それいいな！　じゃあそれで」

「はい、じゃあ後こちらからのプレゼントは、リンカーコアとデバイスで」

「分かった、けどデバイスなんてどうするんだ、生まれたとき持ってるんじゃ変だぞ」

「それはですね、どっかに隠しておいて記憶が戻るときに一緒に在りかが分かる、みたいので」

「まぁ、それが妥当だな」

ふぅ、後はこっちからの条件だけど。

「それで、そちらの条件の方は？」

「う～ん、ちょっとタイム、考えるから」

「分かりました」

どうしよう、条件とか言っておいて何も考えてない。

う～ん

～３０分後～

「よし、これでいこう！」

「あれ、もう決まっちゃったんですか？」

その時神は、どこから出したのかこたつに入っていた、上にはみかん、お茶、せんべいそれにテレビが置いてある、

「ちょうど温まってきたんですが、それに今良い所なんですけど」

テレビには、ま○かにキュウべ○が、

「僕と契約して魔法しょ『言わせねぇーよ』」

俺はとっさにケータイに手を伸ばし、ファイルを開き動画を流した、こんな事もあろうかと○が家のツッコミを保存しておいて良かった。

「しょうがないですね」

気がつくとこたつなどが無くなっていて神だけになった。

「ふぅ、じゃあ条件だが」

ごにょごにょごにょごにょ

「はい、分かりました、これだけでいいんですね」

「ああ、これだけでいい」

「じゃあ、行ってらっしゃいませ」

「ああ、行ってくる」

リ〇カ〇マジカル始まります。

続く

2話　転生！（後書き）

は～い、どうも、ａｋｇｋａです。

主人公が出した条件については今の所秘密です。

ヒミツなんです、単に考えてなかった訳じゃないんです。

後、名前も何も出てませんが、
後で主人公紹介みたいなのする予定なんでそちらでお願いします。

では、また次回も見てくださいねぇ～

じゃんけん、ポン？

うふふふふ

主人公紹介（前書き）

間違えて2回全消し・・・

めっちゃ簡単になってしまいました。

すいません

それと、アビス様いつも感想ありがとうございます。

これからもがんばっていきます！

では、どうぞ～

主人公紹介

『転生前』

名　山田　亮介←もう関係ないw
身長　１２３．４　　←なんか考えるのがめんどくなってきましたw
体重　５６．７　　←以下同文です。
性格　普通

クラスの幽霊的存在、友達もいるにはいるが近くにはいない、
性格は、その友人含めクラス全員が普通と答えたと言うほどの普通っぷり。
成績は、中の下、良くもなく悪くもなく。

趣味　店周り「最新刊の確認など」、パソコン、ゲーム。
夢　特になし

意外と現実的。

『転生後』

名　佐々木　小次郎
身長　１２０　３歳　　１７６　成長後
体重　２５　３歳　　６３　成長後
性格　転生により変わるかも？

見た目、小さいアサシン「Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔのアサシン」そのまんま、成長したらそのままアサシンに「姿だけ」なるかも？

神からの能力など

１．能力　不明

２．デバイス　不明

３．リンカーコア　ＡＡＡ＋？

などなど

これからの成長に期待！

主人公紹介（後書き）

はい、どうも、ａｋｇｋａで～す。

みなさん、すいません。

もう2回の失敗でもうやる気が出ませんでした。

では、これで、

へ～んしんっ

（ｏ｜ｏ）とうっ

3話　新たな生活（前書き）

やっとテスト終わった～

けど、テストが終わると部活が・・・

がんばります。

後前回すいませんでした。

なんかもう書く気になれませんでした。

今回からがんばっていきます！

では、

3話　新たな生活

そこには二人の男がいた。

一人は落ち着かなそうに貧乏揺すりをしながら座っている。

ここは、病院の廊下のベンチ。

ここで新たな命が生まれようとしている。

「大丈夫だ、大丈夫だから落ちつけ」

もう一人の男が言う、彼の父だ、

小次郎にとっての祖父だ。

「ですが、おとうさん」

「もう少し冷静になれ、何も心配はいらん、そう先生達も言っておったじゃろう」

「でも、さっきから、ずっと嫌な予感がするんです」

彼の嫌な予感は良く当たる、実際彼の嫌な予感の後なにかが起る。

「大丈夫だ、きっと、信じよう、それしか出来ないのだから」

祖父も前々から嫌な予感はしていた、そして良く夢に出てくるようになった、

2年前に亡くなった祖母が、
もしかしたらと思ってはいたが、
まさか、祖父は心の中で思った、
（なぁ、お前、頼む、あいつの妻を連れていかないでくれ、頼む）
そこに、
ウィーン
ドアが開いた、
「大変です！赤ちゃんの方は無事出産されたのですが奥様の容体が急変してしまい」
「そ、そんな」
二人の予感が的中した、彼の妻は、病にかかっていた、
だが、そこに無理をしてまで出産したため急変してしまったのだろう。
「今から手術に入ります！」
そして、ナースは戻っていく、
「おい、亜美！、亜美！亜美！！！」

ウィーーン
ドアが閉まる。
「くっ、ちくしょう！、俺が、あいつの事を、止めていれば！」
「落ちつけ、くっ、信じるしかないんだ」
彼はそこに崩れ落ちた。
そして、地面を思いっきり殴っていた。

数時間後
ウィーーン
ドアが開きドクターが出てくる、
「先生！亜美は！亜美はどうなんですか！！」
彼は、ドクターに飛びつくいきよいで聞いた、
だが、ドクターは、何も言わなかった。
そして首を、横に振った。
「うっ、うわあああああああああああああああああああああああああ」

そこに、彼は、泣き崩れた。

0歳ここに佐々木小次郎が生まれた。

アミ

イチロウ

彼の母、佐々木亜美は、小次郎を生み他界した、彼の父、佐々木一郎、彼は、あまりのショックの大きさに、自殺した。

サブロウ

それ以来小次郎は、祖父の、佐々木喜三郎に育てられた。

小次郎の祖父は、昔、この世で一番強い侍として恐れられた、そんな事もあって祖父は、道場を開いている、そこで、よく幼い小次郎と遊んでいた。

その時から、よく木刀など竹刀を触ったり、持ったりしていた、そこで道場に入れてみたら覚えも早くすぐにその中で一番の強さになった。

小次郎3歳の誕生日

「ほら、小次郎、ケーキだぞ」

そう言いながら、喜三郎がケーキを持ってくる。

「わぁー、すご〜い」

そのケーキは、すごく立派だった、3個の炎がゆらゆら揺れている。

「消していい？」

「ああ、いいぞ」

そう聞いてから、息を吹きかけ炎を消す。

「おお」

パチパチパチパチ

喜三郎が拍手する。

そして、喜三郎が電気をつける、すると、小次郎が倒れていた！

「おい！小次郎どうした！しっかりしろ！小次郎！！」

そこで、僕の意識は切れた。

続く

3話　新たな生活（後書き）

はい、どうも、ａｋｇｋａデス。

いつも１時間ぐらいで書いてるんでやっぱそんなに量がありませんね、

けど、ちりも積もれば山となる！コツコツやっていきたいと思います。

感想などお待ちしています。

では、

4話　出会い（前書き）

どうも、投稿が遅れてしまいました、すいません。

なんか、テストや提出物や大会やらで結構忙しかった・・・

まぁ、続きはあとがきで、

では、どぞ。

１２／４一部修正

4話　出会い

「う～ん・・あれ、ここは？」

そこは真っ白い世界、『以下略』

「あなたは神、ですか？」

「はい、あなたを此処へ・・・めんどいから少し目を閉じて」

「えっ、は、はい」

神が手を頭にのせる、そして目を閉じる、

「そら、いっくよ～」

手が光りだし、頭の中になにかの記憶が流れ込んでくるようだ。

やがて光も終わり手をどかす、そして少しの沈黙。

その間に記憶の整理をする、この記憶は、俺の記憶、

転生、条件、神、ま○か、キュウベ○、

あれ、最後の方は違う気が、まぁいいか。

「どうです、気分の方は？」

「ああ、絶好調だ」

やっと復活！

俺、参上！

「じゃあ、早速だが、例のものを」

「はい、ただいま」

「ふぉふぉふぉ、おぬしも悪よのぅ」

「はい？記憶のせいでおかしくなってしまいましたか」

「いや、すまん、忘れてくれ」

記憶が戻ってきたせいでハイテンションになってしまっていたようだ、

「じゃあ例の、条件のことですが、まず一つ目の身体能力アップですがこちらで生まれたときより少しずつ上げておきました、二つ目の魔力＋魔法ですが、ＥＸのミッド、ベルカ、ドラクエ、ネギま、伝勇伝、スレイヤーズで、三つ目、レアスキルは、アイテムクリエイト（Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ！）にナイトウィザードの月衣（かぐや）で、デバイスの場所は、ここです、ここと言っても分から無いでしょうから直接さっきついでにデータを入れときました、ふぅ、こんなもんですかね」

「あ、ああ、良いと思う」

神がこんなにしゃべるとは思ってもみなかった、人はみかけによらないとはこのことを言うのか。

「じゃあこんな感じでじゃあさようなら～」

「えっ、なんでそんなあっさりなの！もうちょいなんかあるでしょ」

「じゃあなに、早くしてくんない、こっちは急いでんの！シャ○？が始まるでしょうが！」

「またアニメかい！、今度は、灼眼○シャ○かよ！」

「そうよ、悪い？、だからじゃあねぇ～、はい、強制転移！」

「お、おい、ちょっとま・・・・・」

シーーーーーーーーーーーーーン

小次郎が目覚めたのは、二日後だったらしい。

続く

４話　出会い（後書き）

ども、また消えました、１回・・・

どれぐらい短くなったんでしょうｗｗ

ＥＳｃボタンの馬鹿やろーう

では、

5話　出会い、かも（前書き）

は～い、どうも、ａｋｇｋａです。

まずですね～、タイトルのかもは、いつもダイレクト投稿なんで、

下書きも何もありゃしないからですねどこまでいけるか分かんないんです。

また消えた場合最初に書いたのよりめっちゃ少なくなるんで、

では、どぞ

5話　出会い、かも

「う、う～ん・・・あれ、ここは、僕の部屋？」

目が覚めるとそこはいつも見ていた天井、僕の部屋だ。

「ふぅ、神のやついきなりだよなぁ」

まぁ、こんな事今更いっても意味がないな、それよりこれからだ。

そこにだれかが階段を上ってくる音がした、

「おーい、小次郎、起きてるかぁー」

祖父の声とともにドアが開かれる、

「おっ、小次郎！もう大丈夫なのか、どこかぐわいが悪いところはないか？」

「だ、大丈夫だから、落ちついて」

「そ、そうだな、落ちつこう・・・本当に大丈夫か？」

「大丈夫だよ、じぃちゃん」

懐かしいな、前も僕が熱を出して寝込んでいた時もこんな感じだったな。

「そうだ、僕ちょっとお腹減っちゃったな」

「おう、そうか、ちょっと待ってろ今すぐに作って来てやる」

そう言いドアを開けて台所に向かう、

そして階段を下りる音が聞こえなくなった。

「ふぅ、今のうちに少し調べておくか」

そう言ってベッドから起き上がる、

「まずは、庭に、、ルーラ、、」

みるみる家に光に包まれ、

ドォォォーーーーーーーーーン

天井にぶつかった、

「痛ってぇぇぇぇぇぇぇぇぇ」

忘れてた、今家の中だ・・・

「おーーーい、どうしたーー、大丈夫かーーーー」

下からじぃちゃんの声がする、

「大丈夫だよ〜〜〜〜〜」

結構大きめな声で返す、

「気おつけろよ～～～～～」

「は～～～～～～～い」

よし！まず先に転移だ、

「よし、庭に転移！」

下にミッド式の魔法陣が現れる、

庭

「よしっと、まず転移は大丈夫っと、次は、結界！」

あたり一面が白色に塗られた、

「はいＯＫっと、次、アイテムクリエイト、うーん、土を集めて言えば出来るかな？」

庭の土を集めて小さい山を作る、

「じゃあ、刀！アイテムクリエイト！」

【土が激しく光る！刀を作れと激しく唸る！みたいな？ｂｙ　ａｋｇｋａ】

土がだんだん刀になっていく、

「マジで出来た・・・じゃあこれは、月衣の中に」

刀がどこかに入っていくように消える、

「・・・やっぱ月衣って便利だな、もらっといて正解だったな」

次に確かめるのはっと、

グゥゥウウウウウウーーーーーー

腹からとてつもない音が、

「とりあえず、喰ってっからにしよう」

転移をして自分の部屋に戻り結界を解く、

するとなにやら良いにおいが、

「おーい、小次郎、下に来れるか？」

「うん、今いく」

においに誘われるように１階に向かって歩いて行く。

～食事中、省略～

「ふぅ」

今はご飯を食べ終えて、少し体を慣らすために公園に行くと言って家を出て、

公園に向かっている途中だ、

「そう言えば、今日って何日だろ、クラスのやつがいたら嫌だな」

小次郎は、学校に意外とちゃんと通っている、成績は良いとは言えないが、運動に関してはかなうものがいない、

だが！そんなこともう終わりだ！僕には、前世の記憶がある、これで前世での悔しい思いをしなくて済む！

そんなことを考えて歩いて行くと公園が見えてきた、

「あれ、あんな所に女の子が、こんな時間に、それに、泣いてる」

続く

5話　出会い、かも（後書き）

どうも～、みなさまもうお分かりですね！

出会うまでは行かなかったものの結構行った方です。

では、みなさま、今度も一週間後ぐらいになりそうです。

また逢う日までごきげんよう。

6話　やっと出会い（前書き）

ども、ａｋｇｋａです。

今回どこまでいけるか分かりません。

時間ないんで行きます。

6話　やっと出会い

「あの女の子は、見間違いじゃ、無いよな。」

時期的にもあってる？いや合ってないか、じゃあ僕がきたせいで時間が狂った？

【は～い、ただ単に考えてませんでした～、なんでなのはいっちゃったんだろ。ｂｙ　ａｋｇｋａ】

もう遅いわ！

しょうがないこれで行くしか・・・

まぁ、ほっておくのもなんだから行くか。

そうしてなのはに近づく、

「ねぇ君なんで泣いているの？」

「ふぇ・・君は？」

「僕は、佐々木小次郎、君は？」

「わ、私はなのは、高町なのはなの」

「なのはちゃんか、なんで泣いてたの？どこか痛いところでもある

の？」

とりあえず怖がらせずに、優しく、

「違うの、なのはのおとうさんがけがをして病院なの、おかあさんとおねえちゃんはお店が忙しいの、お兄ちゃんは怖い顔してるの、だからさびしいの」

やっぱそうだ、なんか早くなってる、まぁ、たぶん、魔法少女化は同じぐらいだろう、じゃあ、まぁ、いいか。

「そうなんだ・・じゃあ一緒に遊ぼう！」

「えっ、いいの？」

「ああ、僕もちょうど暇だったしね」

「ありがとうなの、小次郎君」

その日は日が暮れるまでなのはと遊び続けた。

そこで一言、なんて低レベル！

こんな遊びいつ以来だ、あっ、前世でもこんな遊びしたことない・・・

前世×2ぐらい前か？

別に言いもん、別にこんな事しなくても生きていけるし！

ふん。

正直楽しかった。

また、遊ぼうかな？

もちろん友達になりましたよ、家も教えてもらったし、後で行こ！

それから、家に帰って庭で銃の部品を作る。

あと、5日ぐらいで出来るかな？

スナイパーライフル、これでなのはの背中を、やるとかそういうのじゃないからね！

守る、見守るそう言う意味だから！

もしジュエルシードに負けそうになった、直撃を喰らいそうになっ

た場合に対処できるように練習しとかないと。

「そうだ、ネギまのあれ作ろう！」

あれとはそう！エヴァちゃんの別荘！（ちゃんでいいのかな？まぁいいかいないんだし）

えっとまず丸っこい球状の土を・・・・・

「これであとは設定だけ、えっと1時間を1日にっと、あと、・・・中でおこなう内容？じゃあ、鍛練、休息、研究、製造、かな、よし魔力を流して。」

玉が光、中が見える、もろレーベンスシュルト城、まぁ予想どうり。

よしこれで鍛練場所は困らない、あと製造場所も、

まぁまた明日、

飯食って寝よう、

今日はなんだか疲れた、

おやすみ、パト〇ッシュ、

僕はもう疲れたよ。

続く

6話　やっと出会い（後書き）

やったー、久しぶりに消えることなく投稿出来た、

まぁ、なんです、すいません！

この前ノリで書いちゃいました。

テヘ☆ミ

では、また、

7話　鍛練！（前書き）

どうも、ａｋｇｋａです。今回は、

文字どうりに鍛練について少しやっていきたいと思います。

では

7話　鍛練！

～別荘～

まずは、鍛練だな、ひたすらやろう。

陰分身を使えるようになりたい！

今の身体能力アップしている状態なら可能のはず！

～3時間後～

「と、とりあえず終了～・はぁ・・はぁ・・はぁ」

あれからひたすら練習した、そして、やっと、2人には完ぺきになれるようになった！

これで鍛練と製造に分けられる。

けど、

「まず、休もう」

寝室に向かって、ドアを開け、ベットにダイブ！

「すぅー、すぅー・・・」
すぐに寝息を立てて寝てしまった。

「よーし、次は魔法だ！」
寝て体力も満タン！外が何時かは知らないが別にいいや、
「よし、この前できなかった魔法を、まず伝勇伝、『求めるは雷鳴、稲光！』」
手のひらを前に出し詠唱を唱える、
魔法陣から雷撃が発射される、そして木に当たり木がはじけ飛ぶ。
「伝勇伝はＯＫっと、次は、スレイヤーズ『全ての力の源よ、輝き燃える赤き炎よ、我が手に集いて力となれ、ファイヤーボール！』」
手から炎の塊が放たれる、
「ＯＫ！、次、ネギま『ウンデキム・スピーリトウス・ルーキス（光の精霊１１柱）コエウンテース（集い来たりて）サギテント・イニミクム（敵を射て）サギタ・マギカ！（魔法の射手！）』」
・・・出た、やったー、全部出た！

けど、もっとやりたいな、よしやろう。

『黄昏よりも暗き存在(もの)、血の流れよりも赤き存在(もの)

時間(とき)の流れに埋もれし偉大なる汝の名において、

我ここに闇に誓わん、我らが前に立ち塞がりし

全ての愚かなるものに、我と汝が力もて、等しく滅びを与えんことを、

竜破斬！！（ドラグ・スレイブ！！）』

ドォーーーーーーーーーーーン

やばっ、5分の1ぐらい吹き飛んじゃった、

「やっちゃった、テヘ☆ミ」

一人でやってると悲しくなってくる今日この頃、残りすべてを修理に使ってしまった、

壊れたやつを部品にしたからそこまでだったけど。

そんなこんなで鍛練の日々は過ぎていく。

続く

7話　鍛練！（後書き）

・・・雑ですね、すいません思い付きません。

最初の計画からも大幅にずれちゃいましたし、

最初なのはと会わない事にしようと思ってたんです。

その間ずっと鍛練って感じで、

もう自分で意味分かんなくなってきました。

次も短いと思いますがこれからもよろしくお願いします。

では、

8話　無（前書き）

なんかタイトルがもう尽きた今日この頃、どうもａｋｇｋａです。

今回すいませんでした、結構投稿が遅くなってしまって、

ですが、あと一週間で冬休み！部活があるけど・・・

冬休みに今回の分投稿します。

長々とすいません、ではどうぞ。

8話　無

今僕は2年になった！数年間抜けた？

【なんのことやら～そんなの知らないなぁ～ｂｙ　ａｋｇｋａ】

なんか電波が、まぁいいや、じゃあ開いていた数年間の事を簡単に説明しよう。

すうねんかんにやったこと　　ささき　こじろう

○　なのはちゃんとあそんだ。

○　たんれんをした。

いじょう。

まぁこんな感じで数年間過ぎて行ったのです。

そう言えば学校はちょっと無理を言って入れてもらいました、えっ、どこにって？そりゃもちろん。

『私立聖祥大附属小学校』にだよ、だって初めての友達がいる小学校だよ！行くに決まってんじゃん！

ほんとうれしかった、前世ほとんど友達と呼べるやつなんかいなかったしな。

っと話がそれた、でここ数年間やったのは以下の通りだ。

その結果がこれです、どぞ。

ミッド

ほとんどの魔法の使用可能、強力魔法３連続ＯＫ！

ベルカ

上に同じ

ＤＱ

全使用可能、ジゴスパ５回ＯＫ

ネギま！

だいたいＯＫ、陰分身６体行けるようになった！

伝勇伝

神様のサービスか知らないが、目に魔法陣っぽいのが出てきた、魔

法もバッチシ（他のやつもこれのおかげ？）

スレイヤーズ

色々出来た（やるたびに壊れていく別荘、ただいま5代目）威力、別荘破壊が楽勝ぐらい

まぁこんなものです、けど分身が6体にできてさらに効率UP結構楽になった。

まぁこんなだらだら喋っていてもしょうがないと言えばしょうがないんだが、

やることがない、暇だ、結構詰めて鍛練やってたから休みにしたのはいいけどやることがない。

そうだ！別荘を改造しよう！

まず設定変更、じゃあ、こっちの1分があっちの1年になるようにしてっと・・・・

たったらたったた～

小次郎は別荘6代目をゲットした。

これでさらに毎日が楽になるだろう。

続く

8話　無（後書き）

はい、すいませんでした！

雑です、眠いです、ネタがまとまりません！

次もきっとgdgdな感じになると思いますがこれからもよろしくお願いします。

あと、感想をくださった、トッシー様ありがとうございます。

あっ、デバイス、出そうと思ってたのに忘れた、まぁ次でいいや。

では、

9話　そうだデバイス取りに行こう！（前書き）

キノコ狩り（または京都）に行こう！みたいな感じでw

「くらえメイプルキ〇コ！」

まぁなんです、書くことがないんでどうぞ。

１２／１９　一部修正

9話　そうだデバイス取りに行こう！

～下校中～

「そうだ、デバイス取りに行こう」

下校中ふと思い出した、まだ取り行ってないや。

「今日は特に予定はなかったはずだから、よし、行こう」

玄関を開けかばんを投げ入る、

「じぃちゃん、ちょっと出かけてくる」

「ああ、分かった、気おつけてな」

居間の方から声が帰ってくる、

「うん、行ってきます！」

「行ってらっしゃい」

とりあえず公園まで来た、

「じゃあ、場所はどこかな？・・・こっちかな？」

なんだかこっちにあるようなきがする、明確な地図があると楽なん

だけどな。

それから勘?に従って歩いて行く、そこには、長き間使われていないような病院があった。

【ぶっちゃけてあの病院です、あのお化け屋敷。ｂｙ　ａｋｇｋａ】

それと僕は行ったことないです。・・・あれ、僕誰に話してたんだろ?

まぁ、今はそれどころじゃないな。

「入ってみるか」

ギィィィィィ

ドアが鈍い音を上げて開かれる、

「マジででそうなんだけど」

はっきり言おう、怖い!めっちゃくちゃ怖い!こう見えても僕チキンなんですよ!どう見えてる分からないけど・・・

「此処っぽいかも」

勘?が言っている、

「ま、まずは、お、落ちつこう、すぅー、はぁー、すぅー、はぁー」

少しは落ちつけたかな?

「行かなくちゃ始まらないんだ！行こう！」

一気にドアを開ける、と、そこには、

「はい？」

普通の部屋だった、普通に住めそう、

その部屋の中心の辺りに一つのテーブルその上に指輪が二つ置いてあった。

「えっと、これが僕のデバイス？」

テーブルに置かれた銀色と金色の指輪見る、

〈はい、私たちがあなた様のデバイスです〉

なんと言うことでしょう、デバイスが喋っているではないですか。

「えっ、あ、そ、そうなんだ」

そうだった、喋れるんだよな、忘れてた。

〈早速ですがご主人様、登録を〉

「んっ、了解」

たしか個体名称と使用魔法種類？を決めればいいはず。

「よし、個体名称登録、銀を雛里、金を朱里、使用魔法、ミッド、ベルカの両立」

〈了解しました、ではご主人様、続けてセットアップを〉

「分かった」

ここで武器と防具を決めるのか、うーん、あっそうだ、よしこれで行こう。

「朱里、雛里セットアップ！」

《〈せっとあっぷ！〉》

朱里を刀に、雛里を着物に。

「ふぅー、こんなもんかな」

はい、もろアサシン（ステイナイトの方）です。

軽く刀を振ってみる、

ビュン、ビュン、ビュン。

めっちゃ軽いな、

〈登録完了です、ご主人様〉

朱里が声をかけてくれる、

「ああ、分かった、じゃあここにいる理由もないわけだし帰るか」

バリヤジャケットと刀を指輪に戻して右手にはめる。

またあの道を通るのは嫌だがしょうがないか、

勇気を振り絞ってドアを開けそのままの勢いで一階を目指して走る。

「こっちにおいで〜」

「聞こえない、聞こえない、聞こえない、聞こえない、聞こえない、聞こえない、聞こえない、聞こえない、聞こえない、聞こえない、聞こえない、聞こえない、聞こえない、聞こえない、聞こえない、聞こえない」

バン！

ドアの思いっきり開ける。

「はぁ、はぁ・・・はぁ、やったぞ」

後ろには病院、脱出成功！

「よっしゃーーーーー」

〈あの、ご主人様？なぜ魔法を使わなかったんですか？〉

「へ？」

魔法？・・・あ、ＤＱのリレミト・・・

「馬鹿やろーーーーーーーーーーーーーー！！！」

こうして晴れてデバイスを手に入れた小次郎は、さらに鍛錬に励むようになったとさ。

続く

9話　そうだデバイス取りに行こう！（後書き）

はい、どうも、ａｋｇｋａです。

えっとですね、デバイスの名前ですが、恋姫の２人です。

諸葛亮こと朱里（話す時、〈〉）、鳳統こと雛里（話す時《》）、私は、２人が大好きです。

とまぁそんなことどうでもいいですね、すいません。

まぁ書くことないんで、また、

では。

１０話　それから（前書き）

ネタが無し、

飛びます！飛びます！

では。

10話　それから

「そう言えば、もう1年になるんだな」

デバイスを手に入れてから1年が経った。

〈そうですね、時がたつのは早いものです〉

朱里が答えてくれる、

《あれからそんな経つんですね》

雛里も、最初こそ朱里だけが話していたが今は慣れてきたのか、結構話しかけてくれる。

とまぁ今ここ別荘で鍛練中、1年間デバイスの練習をしてきた今ならユーノぐらいは勝てる気がする！

「よし、ここまでにするか」

《そうですね、お疲れ様です》

僕は、朱里と雛里を指輪に戻して椅子に座ってアクエリ〇スを飲む。

「やっぱり鍛練の後の一杯は良いね！」

〈ご主人様、とってもおやじみたいです〉

「えぇー、けど良いんだよ」

《良いことについては認めますけど》
そんな話をしながら時間を待つ、
「そろそろ時間かな」
〈はい〉
あと少しで1年『別荘の中で』経つ、あっちでは1分、こっちで1年まだなんだかなれない。
「朱里、あっちで僕何してたんだっけ？」
〈学校へ行く準備をしていましたよ〉
朱里に聞くとだいたいの事は分かる、
「ありがと、助かるよ」
〈ありがとうございます〉
《ご主人様～》
「雛里も助かってるよ、ありがと」
《えへへ～、どういたしまして》
お、時間みたいだな、よし学校だ！

『『めんどい！』』

いちょう中学に行っていたのだから小学校の勉強は簡単である、よって、眠い！

1年で足し算、引き算、2年で九九、ほんと嫌だった、だからと言って全部答えて注目されるのも嫌だった、だから適当にやって上位にいるぐらいにしといた。

「まぁ、基本が大事だよな」

自分に言い聞かせるが、基本中の基本だろ！いくらなんでも簡単すぎる！

はぁ、3年はどうなる事か。

あ、そうだ、アリサとすずかと友達になりました！なのはちゃんの紹介で、あのイベントは・・・・

「忘れてた、テヘッ☆ミ」

だって小学校を前世より良く暮らせるように頑張っていたんだもんしょうがない。

なんてことがありました、そして魔法少女になるイベントがもう目の前な今日この頃、僕は学校に登校した。

続く

１０話　それから（後書き）

どうも、無事ウイルス性胃腸炎から回復しました。

もっと書くとか言ってたのに書けずすいません。

けどこれから書いていきたいと思います。

またよろしくお願いします。

では。

１１話　原作始まり（前書き）

連続投稿！

眠いです、変になってると思いますがそこはしょうがないと思ってください。

では。

１１話　原作始まり

「いってきま～す」

「いってらっしゃい」

祖父にあいさつをして家を出る、元から家が近かったので歩いて向かう。

トテチテとてちてトテチテとてちて

ガラッ

「おはよ～」

ドアを開けあいさつ、

「おはよ～」

帰ってくるあいさつ、うん、日常だ。

あ、アリサすずかになのはちゃん、あいさつっと、

「おはよ～」

「あ、小次郎、おはよ～」

「おはよう、小次郎君」

「おはよ～、小次郎くん」

上にアリサ、すずか、なのはちゃんと言った感じだ、

「あんた、いつも思うけどもっと早く来ればいいのに、あと3分よ」

「分かってるよ、3分あれば十分」

要る物を机、要らないものをまとめてかばんにそして掛ける。

「よし、終了」

「あんたもう終わったの！？」

「うん、要るものと分けとけば入れるだけで済むから」

「1分とちょっと、早いね小次郎くん」

「色々工夫したからね～」

「へ～」

「そうなんだ」

まぁ、何時もどうりの会話だ、

キーンコーンカーンコーン

始まりのチャイムが鳴る、また、めんどくさい一日が始まる。

〜学校省略〜

「小次郎、帰りましょ」

「了解」

いつも余り一緒には帰らないのだがなんでも、不審者が出るからグループになって帰るらしい、
メンバーは何時もどうりアリサ、すずか、なのは、僕だ。
ちなみに肩には木刀の入った細長い袋?を掛けている、護身用として。

一緒には帰らないと言ったが決して仲が悪いとかではない〜・・・助けて・・・〜、家の場所などでバスで3人は帰っているからだ、じゃあなんで今いるのかって、歩いているからだよ、じゃあなんで今日はバスじゃないのかだって、それは、大人でもないけど大人の一歩を踏み出している者の事情だよ。
あれなんか聞こえたような気がする。

「あ、なのは!どうしたの!」

なのはちゃんが林の方へ駆けていく、そうだユーノだ!、じゃあさっきのは念話か、

「追いかけよう」

一言いって追いかける、そこにはフェレットもどきを抱えたなのはちゃん、

「・・・イタチ？」

「僕は、フェレットに一票」

「私もフェレットだと思う」

「ど、どうしよう～」

「まず、動物病院だと思う」

「ならこっちよ！」

アリサを先頭に病院へ駆けていく、幸い貧弱しているだけとのこと、そしてそこに預かってもらうことにした。

～夜～

｛｛僕の声が聞こえますか？｝｝

ユーノの念話だな、行くか。

｛｛朱里、雛里いつものに｝｝

｛｛＜《はい、せっとあっぷ！》＞｝｝

そして月衣（かぐや）からアサシン（ｆｅｔｅ／ｚｅｒｏの方）の仮面を取り着ける、

よし、行くぞ。

続く

１１話　原作始まり（後書き）

変に切ってすいません、眠いです。

〜〜は念話です。

では、

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7590y/

魔法少女リリカルなのは～転生～

2011年12月30日02時45分発行